

本科 1 期 6 月度

解答

Z会東大進学教室

高 2 難関大国語



【問題】（演習）

出典…高橋英夫『ブルーノ・タウト』／立教大学 経済学部 97年

文章略解

音楽・舞踊・演劇等の諸芸術の「完璧」が「自然」そのものであるのに対し、建築だけが「完璧」と「自然」が切斷されている。タウトが東照宮を「キッチュ」と規定したのは、建築の本源的孤立を過たず射抜いている。人為人工の極地の中に再生していく自然性がある桂離宮は、その意味で「建築」ではない。いかにも建築そのものである東照宮と、建築ではない建築と言える桂離宮、その両者を見出したことは、タウトにとっての一つの覚醒の経験を意味していた。

解答

問1 イ＝否認

口＝含有

ハ＝傑出

ニ＝依然

問2 a＝ざんしん

b＝はいち

問3 3

問4 建築は立する（22行目）

問5 建築の特性を自然から切り離された人為性にみるならば、人為の極地の中に自然性を内包する桂離宮は、その見解と相容れないから。〔60字・解答例〕

問6 「完璧な人工物」（8字）（13行目）

【問題】(自習)

出典：中村良夫『風景学・実践篇』／青山学院大学 経済学部A 02年一部改

文章略解

盆栽をはじめ立花・生け花などはいずれも庭との関係が常に強く意識されており、日本における座敷と庭との不即不離な関係と対応している。屋内と屋外を截然と分ける欧米の住居に比して、外に向かって開け放たれた日本家屋においては、座敷と庭は合わせ鏡のように互いを規定し合う。日本人は確かに自然を愛したが、ありのままの自然を手元に置くのではなく、庭から坪庭、盆栽、生け花へと至る自然の社会化・作法化こそが問題であった。

解答

問1 (工)　問2 (ウ)

問3 d→a→c→b

問4 流儀

問5 (オ)

問6 身辺へたぐり寄せられた山水〔13字〕(38行目)

問7 (イ)

問1 (イ)と(オ)は論外。(ア)「素封」は、「領地や位は持たないが、大名と並ぶ大金持ち」のこと。文脈に全く合わない。(ウ)の「本性」、(エ)の「由緒」で迷うところか。「由緒」は、「物事のいわれや来歴」のこと。

「ここの高度の園芸術の素姓を見定めねばならない」（4行目）

「ここの高度の園芸術」とは、言うまでもなく盆栽のこと。よって、この「盆栽の素姓を見定めよう!」との提言のあと、盆栽の何について論を掘り下げているかを追つていけば、自ずと解答も見えてくる筈である。

盆栽については、主に5～9行目で言及されている。

○盆栽とは日本の生活史のなかでどういう位置を占めるのか。

○およそ平安末ないし鎌倉期に発した盆栽は中世を通じて、

これらの表現から、盆栽（と、それに表象される日本の座敷——庭觀）の歴史的変遷に焦点が当たられていることは明らか。よつて(エ)「由緒」がベター。そもそも「素姓」の辞書義は、「①血筋・家柄・生まれ・育ち ②物のいわれ・由来・由緒」である。

問2 空欄【一】の直後に、「あたかも自然の山峰とそれを借景した庭の・・・・・関係」という比喩^{ひゆ}が用いられているので、まずは、そもそも比喩がどういう表現技法なのかを明らかにしておこう。

(例) もみじのような手

本来「もみじ」と「手」は、何ら縁もゆかりもない二者のはずである。そんな二者を、なにゆえ「比喩」という表現技法で結びつけることが可能なのかなどと、両者の「形狀」が似ているからである。

すなわち、比喩というのは「全く異質な二者を、何らかの「共通項」を見出すことによって結びつける表現技法」と言うことができる（比喩にまつわる設問は意外と多いので、これは覚えておくとどこかで役立つはずだ）。

このことをふまえて、空欄【I】とその後に目をやると、

【I】の関係

≡

自然の山峰とそれを借景した庭の関係

といふ図式を見出すことができる。従つて、



と類似する「関係」が【I】に入るということになる。そこで【I】周辺に目をやると、

- 6～7行目：盆栽は中世を通じて庭先の台または縁に置かれ、庭の築山を背景として、
- 9行目 .. 盆栽は築山を背景として眺めるものだった

つまり、



といふ関係を見出すことができる。よって解答は(ウ)。

問3 直後に「野生から掌中」とあるので、各選択肢を「野生（屋外）→掌中（屋内）」の順に並べればよい。すると、

d 山（＝自然の山峰）

←

a 借景庭

←

c 濡れ縁の盆栽（「濡れ縁」とは、通常の縁側の外に敷いた、雨ざらしの縁のこと）

←

b 床の生け花

となる。

問5 25行目にあるように、この芭蕉の句は、「座敷と庭の美しい契りを精確に言いとめた」ものであるという。「座敷と庭の契り（関

係）」とは、直後に述べられているように、

- ・不即不離の対をなす
- ・庭なしに座敷はなく、座敷なしに庭はない
- ・合わせ鏡のように、そこに映った互いの姿によってのみ存在する
- ・互いに鮮烈な個性を定義している

といったものであり、さらに本文15～23行目に説明されているように、欧米と違つて日本の伝統家屋においては、座敷の中に外の空気が自由に入つてくるという事情もある。従つて「A 座敷」とは、「屋外環境と密接にリンクした、外の空気が自由に入つてくるような座敷」ということになろうか。

A

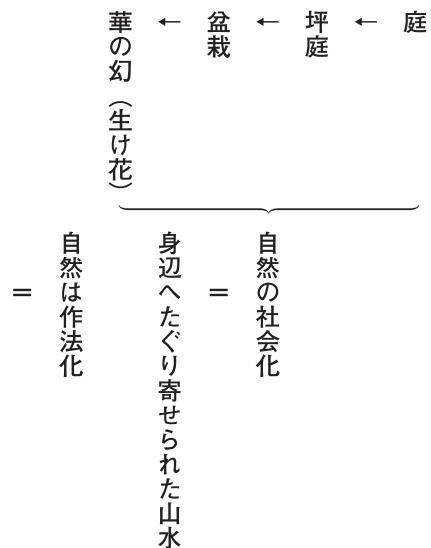
さらに気をつけなければいけないのは、芭蕉のこの句には「季語」にあたる語が見出せない。そこで

Aに入る語で、その

欠損を補うことになる。よつて解答は(オ)。

問6 傍線部の直後に「しかし、原始のままの自然を身近に置いたりはしなかった。」とあるので、解答は「手つかずの自然」ではないことにある。そこで、傍線部以降の流れをまとめるといふことである。

太古の自然‥×（敬して遠ざける）



従つて、解答の候補は

- ①身邊へたぐり寄せられた山水（13字）
- ②人間と自然との美的默契（11字）

の二つになろうか。ただし、ここで問われているのは日本人が愛した「自然」である。①の「山水」ならば「自然」の換言表現と見なせようが、②はあくまで「默契」である。よって①がここでの解答としては妥当だということになる。

問7

(ア)は冒頭の記述に合致する。(ウ)は15～16行目、21～22行目に對応する。(エ)は35行目、41行目に對応する。(オ)は40～41行目に對応する。それに対して、(イ)は「個々に独立している庭と座敷」が誤り。

●
メ
モ
●

【問題】(演習)

出典：作田啓一『恥の文化再考「恥と孤独—恥の文化再考」』の一節 一部省略あり / 法政大学 法学部 92年 改題

文章略解

日本の家族は、より大きい集団の単位へと高度に組織化されているため、社会に対する防衛機能が弱く、外社会の要求へのコンフォーミティ（同調）を育成する機関ともなる。それに対して西欧の家族は、防衛機能が強く、外社会に向かって開かれていない密室となっている。この家族のあり方から、西欧では、家族が子どもを外社会から隔離することで、「近代的自我」を培養したが、家族が社会に対して密室たりえない日本では、「家」への反逆によつて「近代的自我」を成長させねばならなかつた。

解答

問1 A ≡ (エ)

C ≡ (ア)

D ≡ (オ)

E ≡ (イ)

F ≡ (ウ)

問2 ① ≡ 措置

② ≡ 遮断

③ ≡ 内省

④ ≡ 培養

⑤ ≡ 近隣

問3 (エ)

問4 近代的自我を養成する場となる家族に反撥することで近代的自我を成長させようとしたことになるから。〔47字・解答例〕

／日本では、近代的自我を、西欧では養成する場となつた家族に反逆することで成長させたことになり、近代化であるにもかかわらず西欧化ではなかつたから。〔71字・別解例〕

問
6

X
||
(イ)

Y
||
(エ)

(ウ)
||
×

(エ)
||
○

(オ)
||
×

【問題】(自習)

出典：作田啓一『恥の文化再考』／東京大学 84年

文章略解

恥に不可欠な要素である羞恥により、その行動規制は自我の内側からも行われる。恥が理想我への奨励の役割を果たすとか近代化の動因になったとかいう議論は、能動的な活動に高い価値を与える西欧的達成の原理における有効性の比較にすぎない。羞恥は、達成の原理に伴う競争のスピリットを抑制し集団的エゴイズムとも対決してきた。またより広範な連帯を可能にする点で、未来社会において結合の重要な一形式となるはずだ。

解答

問1 羞恥による行動規制は自我の内側からなされ、罪も罰や非難の恐れから学ばれるから。〔39字・解答例〕

問2 能動的活動に高い価値を与える、西欧的ヒューマニズムの達成の原理に基づいた有効性の比較だから。〔46字・解答例〕

問3 競争のスピリットを抑制し、集団的エゴイズムに対決する。またより広範な連帯を可能にし、将来結合の重要な一形式となる。〔57字・解答例〕

問4

(a) 奨励

(b) 徒党

(c) 事大

問1 第一段落「それでは」までの趣旨に関する設問。傍線部アを述部とする一文の冒頭に「したがって」とあるからわかりやすい。

まず「恥」についてだが、冒頭から「恥に不可欠な要素として羞恥が含まれていることを認めるなら、恥による行動の規制は外がわの世間から行なわれるだけではなく、自我の内がわからも行なわれるといわなければならない。」と説明されている。「恥＝外面向的制裁」（7行目）が「かなりの無理がある。」（8行目）ことは、「恥による行動の規制は外がわの世間から行なわれるだけでなく」で言われている。それを支えるのが「恥に不可欠な要素として羞恥……自我の内がわからも行なわれる……」の部分だ。

続いて「罪」の方だが、これは「罪にかんしても同じことがいえる。」（2行目）から始まる。「罪＝内面向的制裁→かなりの無理がある」が「罪による制裁はいつも内面向的な良心の呵責だけであるとは限らない。」（3行目）で言われている。それを支えるのが、この後に続く「人間の社会が存在するところではどこでも、……」以降の例である。特に「人は刑事上の罰や世論の非難を恐れて行動を抑制する。さらに、われわれが罪の觀念をはじめて学ぶのは、親の言いつけに背くと罰を受けることを知る段階においてであつて」あたりに注目しよう。

実はこの二つは、傍線部ア直後でもコンパクトに繰り返されている。「善惡基準に立つ罪の觀念が最初は外面向的制裁を通じて学ばれるように、優劣基準に立つ恥の觀念も外界からの判定にかかわりなく個人の行動を規制しうる。」（8～9行目）の一文がそれだ。ここも利用すべきだが、それだけでは「恥＝外面向的制裁、罪＝内面向的制裁→かなりの無理がある」の単純な否定になりがちなので注意して解答を作成しよう。

a 恥に不可欠な要素として羞恥が含まれていることを認めるなら、恥による行動の規制は外がわの世間からも行なわれるだけでなく、自我の内がわからも行なわれるといわなければならない。

b 罪に関する同じことがいえる。罪による制裁はいつも内面的な良心の呵責だけであるとは限らない。人間の社会が存在するところではどこでも、人は刑事上の罰や世論の非難を恐れて行動を抑制する。さらに、われわれが罪の観念をはじめて学ぶのは、親の言いつけに背くと罰を受けることを知る段階においてであつて……

←
〈したがつて〉

● 恥＝外面向的制裁、罪＝内面向的制裁というベネディクトの図式にはかなりの無理がある。

→

b 善悪基準に立つ罪の観念が最初は外面向的制裁を通じて学ばれるようにな、

a 優劣基準に立つ恥の観念も外界からの判定にかかわりなく個人の行動を規制しうる。

問2

第一段落後半の文章構造と趣旨とを尋ねる設問。

直接的には、傍線部イを述部とする一文冒頭の「そのかぎりにおいて」（19行目）を説明すればよい。「その」という指示語の内容を明らかにするわけだ。ここで、傍線部イの主語たる「これらの議論」という語の繰り返しと「けれども」という逆接の接続語に着目して、構造を考える。

〈これらの議論は〉

a 恥の文化に対する罪の文化的優越性を暗黙のうちに前提とするキリスト教中心的な考え方への挑戦である。

←
（したがつて）

〈それは〉

a 有意味な異論ではある。（プラス価値）

⇒ 《けれども》

β 能動的な活動に高い価値を与える達成の原理に立つて、

α 罪と同じように恥もまた、あるいはむしろ罪よりも恥のほうが有効だと指摘する。

β にとどまっている。(マイナス価値)

← (そのかぎりにおいて)

〈これらの議論は〉

β 西欧的ヒューマニズムの枠を

β 越えてはいられない。(マイナス価値)

「けれども」前後のα同士、すなわち「恥の文化に対する罪の文化の優越性を暗黙のうちに前提とするキリスト教中心的な考え方への挑戦である。(16~17行目)と「罪と同じように恥もまた、あるいはむしろ罪よりも恥のほうが有効だということを指摘する」(18~19行目)は、ほぼ同趣旨である。すると、「けれども」の作る対立関係における「けれども」以降の主旨は、β「能動的な活動に高い価値を与える達成の原理に立つて……にとどまっている。」(17~19行目)にある。「そのかぎりにおいて」はこのを受ける。αはプラス価値、βはマイナス価値であることに注目しよう。「能動的な活動に高い価値を与える達成の原理に立つて」と「西欧的ヒューマニズムの枠」が対応し、「にとどまっている」と「を越えてはいらない」が対応することが確認される。

最後に、第三段落冒頭「さいごに、別の観点から恥の観念のもつ社会的機能を取上げてみよう。恥はアチーヴメントの動機づけを強化するが、他方では……」(20~21行目)に着目してみる。第二段落は「恥はアチーヴメントの動機づけを強化する」という話題であったことが裏付けられる。続く第三段落から、「別の観点」「他方では」と、視点が転換されるのだ。

問3

第三段落、第四段落の主旨を求める設問。設問文に「筆者の」とあることに注意しよう。「二つの評価」というのは、単なるプラス・マイナス二つの評価ということではない。あくまでも、世間の常識ではなく、「筆者の評価」を求めていた。尋ねられていく「羞恥」という言葉の繰り返しに留意しよう。

まずは第三段落だが、問2で見たように、それまでの「達成の原理」から翻つて「抑制の原理」へと観点を転じている。「達成

の原理に伴う競争のスピリットを抑制する作用をもつ。」（21行目）がそれだ。「この点において恥の内向化の側面としての羞恥が重要な役割を演ずる。」（21～22行目）とあるから、ここを解答に使う。ここまででは、「個人」レベルでの話。「……からである。」（23行目）と受けられる理由付けの文をはさんで、「この限界から突き出た自己」の部分は、本人にとつてだけではなく、他者にとつても羞恥の対象となる。」（23～24行目）から、集団レベル、共同体レベルでの話となる。「こうした羞恥の共同体が、個人の創意や自発性の表現を押さえつけるというマイナスの効果は、もはや議論の余地がないほど明らかにされてきた。」（24～25行目）は、世間一般の評価であり、「だがそれにもかかわらず」と筆者によってやつつけられる。筆者自身の評価はその後、「羞恥の共同体は、達成本位によつて結びついた徒党がもちやすい集団的エゴイズムに対決するところの、一つの拠点となってきたことも忘れてはならない。」（25～27行目）にある。以上が二つめの評価。

二つめの評価は、第四段落の主旨。「恥には二つの社会的機能がある」（29行目）と書いてあるが、一つは「公恥」。問われているのはもう一つの「羞恥」の方だから、「しかし羞恥は、自己主張を助け合う徒党よりも、もつと広汎な連帯を可能にする作用をもつともいえる。」（30～31行目）を解答の材料に使う。「自己の内部の……連帯だからである。」（31～33行目）までは、その理由付け。また「疑いもなくそれは、現在の時点では生産的・創造的な機能をもつことはできない。」（33～34行目）というのは世間の評価で、筆者により「だが」とやつつけられる。その後の「この連帯は、生産力の高まりによつて競争の価値が低下し、有機的な構成が階級・階層の壁を徹底的にこわすまで進んだ未来の社会において、結合の重要な一形式となることは確かだ。」（34～35行目）が、先の世間の評価に対する筆者の側の反駁、評価として重要だ。この二箇所を二つめの評価としてまとめる。

〔第三段落〕

恥は……達成の原理に伴う競争のスピリットを抑制する作用をもつ。この点において恥の内向化の側面としての羞恥が重要な役割を演ずる。

→
（理由）

競争の過程においては当然自己があらわとなつてくるが、この自己顯示は羞恥によつて限界を画されるからである。

←
（理由）

この限界から突き出した自己の部分は、本人にとつてだけではなく、他者にとつても羞恥の対象となる。

（反対意見）こうした羞恥の共同体が、個人の創意や自発性の表現を押さえつけるというマイナスの効果は、もはや議論の余地がないほど明らかにされてきた

←
〈だがそれにもかかわらず〉

羞恥の共同体は、達成本位によつて結びついた徒党がもちやすい集団的エゴイズムに対決するところの、一つの拠点となつてきたことも忘れてはならない。

→
（例）エリートたちの激しい身振りの前で沈黙している大衆……

〔第四段落〕

(前提) じつさい、恥には二つの社会的機能があることを認めなければならない。

←

(比較・公恥)

それ (＝恥の社会的機能) は公恥としては達成や自己主張の動機を強化する力をもっている。

〈が〉

その (公恥としての) 恥じらいの側面は人を孤独な内面生活に引き込む。

⇒ 〈しかし〉

羞恥は、自己主張を助け合う徒党よりも、もつと広汎な連帯を可能にする作用をもつともいえる。

→

(理由)

自己の内部の劣等な部分が……そういう人間同志の連帯は、集団の砦を越えた連帯だからである。

(反対意見)

疑いもなくそれは、現在の時点では生産的・創造的な機能をもつことはできない。

⇒ 〈だが〉

この連帯は、生産力の高まりによって競争の価値が低下し、有機的な構成が階級・階層の壁を徹底的にこわすまで進んだ未来の社会において、結合の重要な一形式となることは確かだ。

→

(例) はにかみがちな日本人は事大主義や権威主義にたいして、無為の立場から消極的に抵抗してきた。

●
メ
モ
●